暑さ 球宴とともに

一字一筆　静岡の今

開会式で選手入場を見守る女子生徒やユニホーム姿の部員＝静岡市駿河区、全日写連・中村明弘さん撮影

今年も梅雨が明けて本格的な夏になった。夏の暑さを、あなたはどんな時に実感しているだろうか。人様々だが、高校野球にまつわる思い出に「暑さ」を感じた人も少なくない。炎天下で泥まみれになって猛練習した高校球児は当然だが、甲子園球場や地方大会の球場で観戦経験のある高校野球ファンも「あの時は暑かった」と思い当たる体験が多いようだ。

筆者にも高校野球で体験した忘れられない「暑い夏」が2回ある。一つは高校1年生の時、母校の応援で行った甲子園である。負けた帰りは鈍行の夜行列車、汗とほこりで黄色くなった白シャツの襟もと。一瞬の暑かった夏は、受験勉強に明け暮れた高校時代の思い出として、今もまぶしくよみがえる。

二つ目は、朝日新聞記者として1975年の57回全国大会を甲子園球場で取材した体験である。

決勝戦は新居浜商（愛媛）対習志野（千葉）。5－4のサヨナラ勝ちで全国制覇した習志野のエースは、小川淳司現ヤクルト監督だった。広島商との準決勝で右肩の痛みが生じたが、台風の接近で決勝戦が2日延期になり、少し休めた。重い肩で優勝はつかんだが、大学、プロ野球の野球人生で再びマウンドに立つことはなかった。恥ずかしながら、取材記者なのに私も熱くなっていた。優勝投手にインタビューして「小川君、肩も壊れよと力投」などと書いた記事を、今は少し反省している。

あれから43年、今年は100回の記念大会となった。7月7日、静岡大会は静岡市駿河区の草薙球場に111校の球児たちが参加して開幕。授業日に配慮しながら27日までの日程で甲子園を目指す。高校生の球宴は、様々なドラマを展開してくれそうだが、今年のそれぞれの思い出には「100」という背番号が付く。

（前静岡県監査委員・富永久雄）